

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 18 日現在

機関番号：54502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20520405

研究課題名（和文）日本手話のコーパスによる類辞構文研究

研究課題名（英文）A Study of Classifier Constructions in Japanese Sign Language Based on Corpus Data

研究代表者

今里 典子 (IMAZATO NORIKO)

神戸市立工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号：90259903

研究成果の概要（和文）：日本手話において「類辞」を含む典型的な構文は、移動事象を表す構文である。移動表現の述部は、最大で3つの動詞、つまり1つの様態動詞と2つの類辞を含む経路動詞からなる連続動詞構文を成す。この述部内で最後に現れる経路動詞は、移動事象とは調和しないような意味をもつ動詞（例えば行動動詞など）と共起する環境で、類辞を失い文法化する可能性があることを、撮影した手話データ分析から明らかにした。連続動詞内のこの環境が日本手話において様々な文法表現を生み出すシステムである。

研究成果の概要（英文）：Motion expressions in Japanese Sign Language (JSL) typically include verbs with what we call “classifiers (CL)”. In typical motion expressions, a predicate usually forms a serial verb construction (SVC), consisting of 3 verbs at most; one manner verb, and two motion verbs with CLs. Our analysis of JSL data shows that the last motion verb in this construction can lose its CL, be grammaticalized, and become a grammatical marker when it co-occurs with a manner verb which is semantically less “congruous” with the motion event (an action verb, for example). It is this SVC that systematically produces grammatical functional words in JSL.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：その他言語

キーワード：日本手話、類辞、連続動詞構文、文法化、使役移動、虚構移動

1. 研究開始当初の背景

日本手話は日本固有の独立した言語でありながら、研究の歴史が短く十分に研究がなされているとは言いがたい。音声を使わず、片手または両手で作られる手形が手話空間に

おいて自由に動く上、それら手の動きとほぼ同時に別のサインが共起する複雑なこの言語を正確に記述するための書記システムが未開発である。このため、研究に利用できるコーパスもなく、その基本的な構造さえ明ら

かではない。そこで本研究開始以前に、ネイティブサイナーによるデータ提供と撮影のシステムを作り、まずは類辞について調査すべく、小規模のデータ収集・分析を実施した。その結果、日本手話における類辞を含む典型的な構文はシンプルな自発的移動事象を表す構文であり、その述部は次の(a)~(e)の「5つの特徴」を持つ事を明らかにしていた。つまり、(a)様態動詞と2つの経路動詞からなる連続動詞を成し、(b)必ず様態を表す要素が先に、経路を表す要素が後に現れ、(c)方向一致制限に従い、(d) 様態動詞単独で移動表現をつくることは、特別な条件がない限り不可能であり、(e)2つの経路動詞の内、最後の経路動詞には類辞が含まれない傾向がある、ということである。しかしもっと大規模なデータでも同様の結果が得られるのかを確認する必要があった。またより複雑な移動事象、例えば使役移動や虚構移動を表す場合にも、同様の構造が見られるのか、さらに(e)の連続動詞を構成する最後の動詞に類辞が含まれない傾向は、どのような環境で見られるのか、なぜ見られるのかが明らかになってはいなかった。

2. 研究の目的

(1) 実証的研究を進める為、日本手話の様々な事象を表す実際の表現データを多く撮影し、その記述方法を工夫し、コーパスを作成する準備を進める事が1つ目の目的である。

(2) より上位の目的は、記述した多くのデータに基づき、日本手話の類辞を含む移動構文に関する文法を明らかにすることである。特に移動事象を表す表現に見られる連続動詞の構造、意味、類辞表現について詳細に分析し、連続動詞を構成する述部の最後にあらわれる経路動詞には、なぜ類辞が含まれない傾向があるのかを明らかにすることが最終的な目的である。

3. 研究の方法

(1) 日本手話のうち、主に関西地方および東海地方のネイティブサイナーから協力をいただき、自然な手話表現を撮影し、提案した記述方法で記述する。

(2) 移動物が空間内のある位置から別の位置まで動くシンプルな自発的移動事象を表す表現だけでなく、使役移動や虚構移動の表現データも集め、特に述部に注目し、動詞の意味の分類、あらわれる順序、省略の可能性、類辞との関係、動詞間の共起関係制限、について分析し整理した。

4. 研究成果

(1) サイナーの数と撮影データ数を増やし、記述方法を提案した。この記述方法は特殊な記号を最小限に抑えるように考慮している。両方の「手」以外で表現される文法的要素、例えば視線、体の位置/向き/傾き、眉あげ、眉寄せ等の表情、あごの位置と動き、頷き、頭の位置と傾き、口型、(サインとサインの間)、などには特定の記号を付すが、凡例を付し、それ以外は出来るだけ語の意味をそのまま表記に活用した記述方法である。手話言語学を専門とする人でなくとも、可能な限り直感的に容易に理解できる方法を採択した。一方で、手話語彙の特徴である、動詞に含まれる様々な要素、例えば手形の向き(見る s<f: サイナー側から前方向に指先を向ける)、類辞やその位置(いる[CL 男]_x: サイナーの利き手で親指を立てた「男」の意味を持つ類辞を x の位置におく)、移動の開始・終点および移動の経路(歩く[CL 男]_{x-yu}: 類辞「男」を x から y の位置まで直線的に動かす)、などを記述できるようにして、分析に耐えるように工夫した。

(2) データを記述・分析した結果、小規模データで観察した類似表現の「5つの特徴」は、規模を大きくしたデータでも基本的に同様の結果が得られることを確認した。その上でさらに以下の事が明らかになった。

① 使役移動および虚構移動表現においても上述の特徴は観察された。

② 連続動詞は、最後の動詞以外に否定辞やアスペクトなどの要素は付くことはできず、連続する動詞の間に、指差しを含む別の語や「間」が入ることがない一続きの形式である。常に3つの動詞が現れる訳ではなく、最大3つ並ぶ事ができるという意味である。移動動詞1つでも良いし、実際には様態動詞と移動動詞の2つで構成される例が多い。また移動動詞2つで述部が構成される場合、1つ目の移動動詞が、本来移動すべき方向とは異なる方向を向いたままで、かつ移動の動きを失うことで経路を表現せず、様態動詞化する例も観察できた。このような観察から、連続動詞構造は、移動様態と移動経路の両方を、様態→経路の順番に、最大3つの動詞に託して表現される表現であると言える。

③ 方向一致制限は、一定の条件では必要ではなくなる。手話言語では、主語が3人称である時に2つの表現方法がある。1つ目は、3人称主語を類辞にして述部に抱合し、サイナーがその移動を目で追って観察しているように表現するナレーター法、2つ目は述部を表現する時に、サイナーが3人称の主語に成り代わって、自らが行為の主体であるかのように自分の体で表現するプロタゴニスト法であるが、ナレーター法で表現する場合には、

方向一致制限は必須ではなくなる。

(3)虚構移動表現では、視覚動詞「見る」を使った表現が圧倒的に多い。

①他の音声言語でも見られるような、視覚的放射、映像の移動、注視点の移動の3つに加えて、4つ目に、視覚的放射と注視点の移動との複合表現が見られた。この4つ目の表現方法を可能にしているのは、日本手話において、手話空間内で手形を移動させる表現（3人称主語の視覚的放射）と、サイナーの視線移動（サイナーによる注視点の移動）を同時に行う事が物理的に可能だという視覚言語の特徴によるものである。

②視覚的放射と注視点の移動の表現は、経路動詞と認識され、様態動詞と連続動詞を成し、自発的移動を表す表現を作り出すことが可能である事も観察した。

(4)述部のうち、連続動詞の最後に現れる経路動詞に類辞が含まれない可能性がある理由は、この動詞が文法化することであると示唆した。

①移動表現の連続動詞をなす述部のうち、最後の経路動詞から類辞が落ちて、一般的な指差しのみで表現される場合がある。類辞が落ちる場合には同時に様態も表されなくなる。例えば動詞：歩く[CL 人]x-y では、「人間」を表す類辞[CL 人]の手形を小刻みに上下に揺らしながら x-y に移動させると「人が x-y の経路を歩く」という意味を表す事ができるが、ここから類辞が落ちるとそれとともに「歩いて」という様態を表していた小刻みの上下の揺れも失われる。類辞とそれに伴い様態を表す動きが簡略化された動詞は連続動詞の2つ目の経路動詞の形式であり、通常は境界越え、境界到着、境界なし等の意味が表される。

②2つ目の経路動詞には、「行く」・「来る」・「去る」等が典型的に見られる。「去る」は、両手手話「出る」が、利き手の片手手話に簡略化された形式であるが、これは境界越えというだけでなく、境界を越えた、つまり今ここにはいない、もう行ってしまったという移動行為の「完了」を表すところにまで意味が拡張している可能性が見られる。

③「行く」は、連続動詞を成す時に、述部の最後にあらわれて、様態・目的・勧誘・命令などの意味を表す構文タイプを作ることができる。これらの連続動詞タイプは、動詞「行く」が、一定の環境において、典型的経路動詞が抱合するはずの類辞と、類辞に伴って様態を表す手形の動きを失い、さらにゴールの場所との一致を必要としなくなっていく事が観察される。このような現象は文法化に伴って見られる音声および形態の簡略化のプロセスであり、「行く」は、目的や勧誘など

の機能をもつ機能語となっていく現象である。

④「行く」が含まれる連続動詞タイプにおいて、様態や目的タイプより、勧誘や命令のタイプの方が、簡略化が進んでいる事から、文法化も進んでいると考えられる。

⑤文法化のプロセスがすすむ為には、一定の環境が必要である。連続動詞内の経路動詞が共起する最初の動詞が、移動の様態を表す動詞ではなく、移動という事象とは意味的に調和しないような動詞、例えば行動動詞などである環境がそれである。

⑥上記の観察は Shibatani(2007)が音声言語において提案した仮説：「文法化は意味的に調和しないような環境において容易になる」に従うものであり、日本手話にも当てはまると言える。日本手話のような視覚言語と音声言語に共通の普遍的な文法化のシステムが見られるということである。

(5)動詞「来る」も文法化し、近未来（および近未来の予測）を表す。

①「来る」のみに見られるこの文法化は連続動詞内で起こるのではないが、その場合でも「来る」に類辞は抱入されない。従って類辞の脱落は日本手話の文法化において一般的な現象であると考えられる。

②動詞「行く」は、虚構移動の構文を経て、一定の環境で文法化し、「知る」・「好む」等の非一致動詞の主語及び目的語の文法関係を明示する機能をもつ語となっている可能性を示唆した。これは Fischer(1996)等がすでに指摘している、文法関係を明示する助動詞と同じものであるが、日本手話の移動構文内において体系的に見られる文法化の現象の結果のひとつとして捉えうる事を議論し指摘した。

音声言語とはモードが異なる日本手話についての知見は、特に言語バリエーションについて、また音声か視覚かというモードに関わらず、言語の普遍性について考える際に非常に重要で高い価値がある事は言うまでもない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 今里典子、日本手話の視覚表現に基づく虚構移動、神戸高専研究紀要、査読有、50号、2012、pp.181-186
- ② 今里典子、日本手話の連続動詞構文、神戸高専研究紀要、査読有、47号、2009、99.135-140

〔学会発表〕(計 5 件)

- ① 今里典子、日本手話について、国立国語研究所共同研究プロジェクト研究発表会、国立国語研究所、2012. 3. 27.
- ② Imazato, Noriko., Grammaticalization of GO/COME in Japanese Sign Language, Special Lecture at University of Texas at Austin, Austin, TX, U.S.A., 2010a,
- ③ Imazato, Noriko., Serial Verb Construction in JSL: 'go' & 'come', Colloquium at Rice University, Houston, TX, U.S.A., 2010b

他 2 件

〔図書〕(計 1 件)

- ① 岸本秀樹(編)、今里典子 他(著)、くろしお出版、『ことばの対象』、2010、pp.15-26

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今里 典子 (IMAZATO NORIKO)

神戸市立工業高等専門学校・一般科・准教授

研究者番号：90259903